



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋【第13回】
部垂の乱

「佐竹義元之墓碑」

茨城県北部の常陸大宮市内を通る国道118号を水戸から大子方面に向かう。同市上町の「上町交差点」を右折し、JR水郡線の踏切を渡る。一帯は旧市街地の中心部。志村大宮病院前を経て「上町東交差点」を左折。道は国道293号となる。少し北に進むと、「総合保健福祉センター入口」交差点である。ここを右折すると、常陸大宮市立大宮小学校（同市北町）の正面にでる。手前に校庭が広がり、校舎がみえる。その奥は崖である。

同校が建つ場所に中世、部垂城があった。小字名として残る古城は「現在、大宮小学校の敷地」と『大宮の地名』（平成22年大宮郷土研究会編集・発行）は書いている。続けて「大宮台地の縁辺にあり、北東側には急な崖がある。中世城郭である部垂城の中心部にあたり、近世は大宮郷校が設けられた。（古城は＝筆者）この部垂城に由来する地名である」という。このほか根小屋、搦の小字名もある。

この部垂城最後の城主を佐竹義元という。その義元の墓碑が同校入口脇に建っている。校庭西側の同校敷地内にあたる。「佐竹義元之墓碑」は明治15年（1882）に建立された。題字を当時の県令（知事）、人見寧、文を北茨城出身の政治家、野口勝一が書いた。佐竹義元は「部垂の乱」で兄の佐竹氏当主、義篤に攻められ、自刃した武将である。野口はその義元を「郷土大宮の先覚者」とし、「義元の魂が還る場所がなくなることは非常に残念」と墓碑に刻んでいる。

「部垂の乱」の発端

佐竹氏四代にわたった「佐竹百年の乱」は、16代当主、義舜の時に終息した。その義舜は永正14年（1517）、48歳で亡くなった。跡を継いだのは嫡男、義篤である。『佐竹家譜』は、享禄2年（1529）、義篤23歳の時に起きた「事件」についてこう述べる。「其弟義元、宇留野義長

に議して部垂の城を襲はんと欲す」と。その弟とは宇留野氏の養子となった義元である。義篤の実の弟にあたる。

城乗っ取りの様子は『佐竹家譜』に次のように書かれている。「義長密に書を其城主小貫兵庫助四臣（一部略）に寄て利を以て是を欺く（一部略）。十月二日夜に入て義元其兵数百輩を率て問道を歴て城に入、中外勢を合て襲ひ込む。兵庫助自ら當て奮戦す。然ども事不意に発するが故に、之を拒ぐこと能わず。火を放て城を焚き遂に自燼す。其子某僅に二歳。乳母是を懷にて密に太田に走る。義元遂に部垂を領す」

「事件」発端の時期は近年の研究で『佐竹家譜』より一年早い「享禄元年（1528）五月ごろから」（『戦国佐竹氏研究の最前線』令和3年、山川出版社発行）とする説が有力。また、小貫氏の立場を「佐竹氏の重臣・小貫俊通の守る部垂城」と記述し、「城主」の表現はしていない。あとは『佐竹家譜』とほぼ同じ内容。これが歴史上、「部垂の乱」といわれる争乱の始まりである。

「乱」に連動した争乱

この事態に佐竹当主の義篤は特段の動きをみせなかった。というのも佐竹氏は自領の内外で対応しなければならない懸案があったからである。城奪取から5年後の天文3年（1534）、義篤は小田氏と江戸氏が戦った「鹿子原合戦」にかかわった。この戦いで家臣の「小田野義孝、天神林某、山県義国、根本某等戦死」（『佐竹家譜』）。「天文3年から同5年までは、江戸氏と佐竹氏側の国衆との紛争が続いた」（『戦国佐竹氏研究の最前線』）。

この間、江戸氏は隣国の岩城氏と結び、佐竹氏を牽制。天文4年（1535）、「岩城成隆、我臣江戸某に覚して兵を率て、当国を侵掠す」（『佐竹家譜』）とある。隣国の在地領主、岩城氏と江戸氏が佐竹領内を侵犯してきた。しかも、時を同じくして高久城（城里町）の高久義貞がこの動きに呼応して高久城で挙兵し、義篤に反旗をひるがえし

た。高久氏は佐竹氏8代当主行義の六男景義を祖とする佐竹一族である。

こうした佐竹一族の反乱は、山入氏を中心とした「佐竹百年の乱」を思い起させる。「佐竹百年の乱」は、室町幕府や鎌倉公方くまがたが絡んでいたとはいえ、主体は宗家と反宗家の争い。いわば身内間の「内乱」である。しかし、この天文年間の争乱は、一族の背後に岩城氏や江戸氏の佐竹領侵犯が絡んでいた。さらに、その背景に当時、陸奥国の覇権争いをめぐる伊達氏を含む有力在地領主の勢力争いが潜んでいた。

奥州伊達氏の存在

義篤の父、義舜の時から外交面で力を発揮した人物に岡本禅哲ぜんてつがいる。その父を岡本曾端そたんという。当時、その曾端宛に伊達氏当主の植宗からの書状が届いていた。その内容が『佐竹家譜』に載っている。これをみると、天文4年（1535）の岩城氏と江戸氏の佐竹領侵犯について伊達植宗が仲裁に入り、岩城氏、江戸氏とも和睦に応じることを伝えている。佐竹氏を含む双方は和睦に向かうことになった。これによって高久氏は孤立した。これを受け義篤は高久城を攻め、高久義貞を屈服させた。

ところで、なぜ岩城氏は佐竹義篤を攻めたのか。その理由が植宗の書状からみえる。そこには天文3年（1534）、伊達植宗は「四倉に出張、義篤の後詰を待、岩城と弓矢を取らんと欲する」（『佐竹家譜』）とある。つまり、伊達植宗は義篤を頼んで岩城氏を北と南から挟み撃ちにしようとしたのである。義篤からみれば、「佐竹百年の乱」で支援をしてくれた岩城氏攻めは本意でなかったであろう。

伊達植宗は当時、「奥州守護職」を得て奥州中部から南部にかけて圧倒的な力を有していた。各地の在地領主と婚姻政策を展開、勢力拡大に余念がなかった。その植宗が岩城氏との婚姻政策が当初、うまくいかなかった。このため植宗は岩城氏領に出兵した、とみられている。この時、植宗が「佐竹義篤に南からの誤詰を求めてきた」（『常陸・秋田佐竹一族』=七宮洋三著、平成13年、新人物往来社発行）。義篤は伊達氏の勢力を踏まえると、この要請を無視することができなかったのかも知れない。

戦国大名化の波

部垂の乱は、義篤からみると、さらに深刻な様

相を呈してきた。「天文七年には岩城・白川・那須氏を介入させようとした義元の動きが露見し、義篤側との激しい抗争が起きる。（一部略）しかも翌年には小場氏も義元に同調し抵抗する」（『戦国佐竹氏研究の最前線』）。こうなると、一族内の動きを押さえれば、事が済む、といったレベルの紛争ではない。外交戦略を駆使して隣国の在地領主の動向を見極めながらの対応が求められる事態となった。

天文8年（1539）、義篤は「小田政治等ト那須政資ヲ援ケ、其子高資ヲ烏山城ニ攻ム」（『新編常陸国誌第九巻「源氏」』）という行動にでた。さらに「十月又烏山ヲ攻ム、抜ケズ引還ル」とある。続いてこうある。「九年部垂ヲ攻ム、義元其子竹寿丸等拒戦シテ死ス、城陥ル」と。『常陸大宮市史資料編2、令和5年発行』も「同8年から始まる北関東・南奥における領主間の対立にも佐竹氏は関わっており、敵対する那須高資の烏山へたびたび出兵している」とある。部垂城急襲は、この那須氏出兵時期に起きているとみていいだろう。

部垂城攻めが義篤軍の那須氏攻略の帰路に行われたのか、どうか。資料上は不明である。ただ、烏山出兵のたびに部垂城の動静を探ることは可能であったろう。「城内ニテハコノ時夢ニモ知ラズ」（『大宮町史』）とあるように部垂城は急襲された。兄のように当主としての地位や権威ついでも持たない義元が描いた「夢」はここに潰えた。兄弟でも「家臣化」して領国形成を図らなければ存続できない時代の波がきた、ということである。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



「時代に埋もれてしまい魂が還る場所がなくなってしまふのは非常に残念なこと」と刻まれている佐竹義元の墓碑=常陸大宮市北町